

第Ⅱ部 地域の歴史と文化遺産の調査（京都府外）

神河町城山古墳群の測量調査

京都府立大学文学部考古学研究室

菱田 哲郎・井上 直樹・中村 彰伸・近藤 史昭

縄手 晴日・西垣 剛志・吉岡 彩夏

1. 調査の目的と経緯

兵庫県神崎郡神河町は、兵庫県のほぼ中央、市川上流部に位置する。この神河町には多くの文化遺産があり、兵庫県指定のほかに、合併以前の神崎町や大河内町の指定文化財として保護されてきたものも多く存在している。古墳についても、町内では城山古墳群や高畑通1号墳が町指定となっており、後期の横穴式石室が早くから注目されてきたことがわかる。

神河町では、未指定のものも含め、地域を特色づける文化遺産をとりあげ、歴史文化基本構想を策定することとなり、それぞれの構成要素について、「地域の宝もの」として検討が進められている。このような調査の一端として、主要な古墳についての測量をおこない、その歴史的評価を明らかにする計画を立てた。

2015年3月と9月に京都府立大学文学部考古学研究室の学生を中心として寺前所在の城山古墳群の測量調査を実施した。それぞれの期間中に、地元向け、小学生向けの説明会を実施し、遺跡の周知をおこなったほか、地域の視点を知るため、新旧の寺前区長から聞き取りをおこなっている。

(菱田)



図1 神河町の位置



図2 城山古墳群の位置（縮尺1/5万）

2. 神河町の地理的環境と歴史的環境

地理的環境

神河町は兵庫県のほぼ中央に位置する自治体である。北は朝来市、南は市川町、姫路市、東は多可町、西は宍粟市と接し、町域を播磨と但馬を結ぶ JR 播但線・国道 312 号・播但連絡自動車道が縦走する。

ハート状をなす町の面積は 202.27km²で、兵庫県の 2.4% を占める。町の約 8 割を山林が占め、千町ヶ峰をはじめ千ヶ峰・暁晴山など 1000 m 級の山々に囲まれている。峰山・砥峰高原は関西地方でも有数の高原地帯となっており、自然志向型の都市住民との交流の場となっている。

平野部には小田原川、市川、越知川などの河川が流れ、「ホタル」や「あまご」などの清流を住み処とする動物などが生息している。聚落はこれら河川沿いに形成され、人口は 11952 人（平成 28 年 1 月現在）、4144 世帯で、以前に比べ減少傾向にある。

産業は町の大部分を占める山林を利用した農林業を中心に発展してきたが、近年では大河内水力発電所や神崎工業団地の開発、宅地開発、特産品開発も進められ、恵まれた自然環境や姫路まで約 40 分、京阪神地域まで約 1 時間 30 分以内という良好な交通アクセスなどを活かした地域振興も進められている。また、近年では映画やドラマのロケ地としての活用など観光事業にも積極的に取り組んでいる。

歴史的環境

神河町の歴史は、約 1 万 3 千年前の旧石器時代にまで遡る。福本遺跡からは旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺構、遺物が発見され、古くから人々が活動していたことをうかがわせる。その後の古墳時代には城山古墳群（寺前）や高畑通り古墳群（東柏尾）などの古墳が造営され、奈良時代に編纂された『播磨国風土記』には「壘岡里」として登場する。

中世南北朝動乱期には、播磨と但馬を結ぶ交通路上に位置することもあって、赤松氏や山名氏の戦場となり、天正年間には羽柴秀吉軍が播磨攻略の一貫として兵を進めている。

江戸時代には当初、姫路藩池田氏の支配下にあったが、寛永 16（1639）年以後、新田・作畑・大畑・岩屋・杉・大山が幕府領となり、他は鳥取藩の飛び地を経て、寛文 3（1663）年、福本藩領となった。そのうち、寛文 6（1666）年には野村が屋形池田領に、貞享 4（1687）年には、吉富・東柏尾・鍛冶屋・大河が吉富池田領となった。

明治 22（1889）年の町村制施行により、神東郡栗賀村（根宇野・山田・中村・栗賀・福本・貝野・寺野・柏尾・東柏尾・加納）・神東郡大山村（吉富・杉・大山・猪篠）、多可郡越知谷村（新田・作畑・大畑・越知・岩屋）、神西郡寺前村（新野・野村・比延・寺前・鍛冶・大河・宇江岩・高朝田・宮野・南小田・上小田）、神西郡長谷村（川上・大川原・本村・赤田・重行・為信・峠・栗・淵）となった。

昭和の大合併によって、昭和 30（1955）年に栗賀村・大山村・越知谷村が合併して神崎町が、寺前村・長谷村が合併して大河内町が成立した。その後、平成 17 年 11 月に神崎町と大河内町が合併して神河町となり、現在に至っている。（井上）

3. 古墳群の分布

城山古墳群は、神埼郡神河町の南部、寺前地区の城山の南山麓にあり、寺前駅を見渡すような場所に立地する。現況は、最明寺に付属する 88 カ所めぐりの中に 2～4 号墳があり、1 号墳は、隣接する山林内にある。

この古墳群は 4 基の古墳から構成される古墳時代後期のものである。尾根上に 2 号墳が、尾根の南斜面には 3・4 号墳、尾根を挟んだ北側斜面に 1 号墳が築造される。2 号墳の東をかすめて北北東に向かう溝は、かつて 1 号墳より北側に存在していた稲荷神社への参道の痕跡であると推測される。

各古墳の標高は、1 号墳が標高 215m 付近と 4 基の中では最も高く、2 号墳は標高 210m 付近、3 号墳・4 号墳は標高 206m 付近となる。1 号墳と 2 号墳間は直線距離で約 20m、2 号墳と 3 号墳間は約 16m、3 号墳と 4 号墳間は約 3.2m 離れた位置にある。

なお、2 号墳の位置する尾根上をさらに上がった場所は展望台となっているが、円形の高まりとなっており、さらに古墳が存在する可能性をもつ。（吉岡）

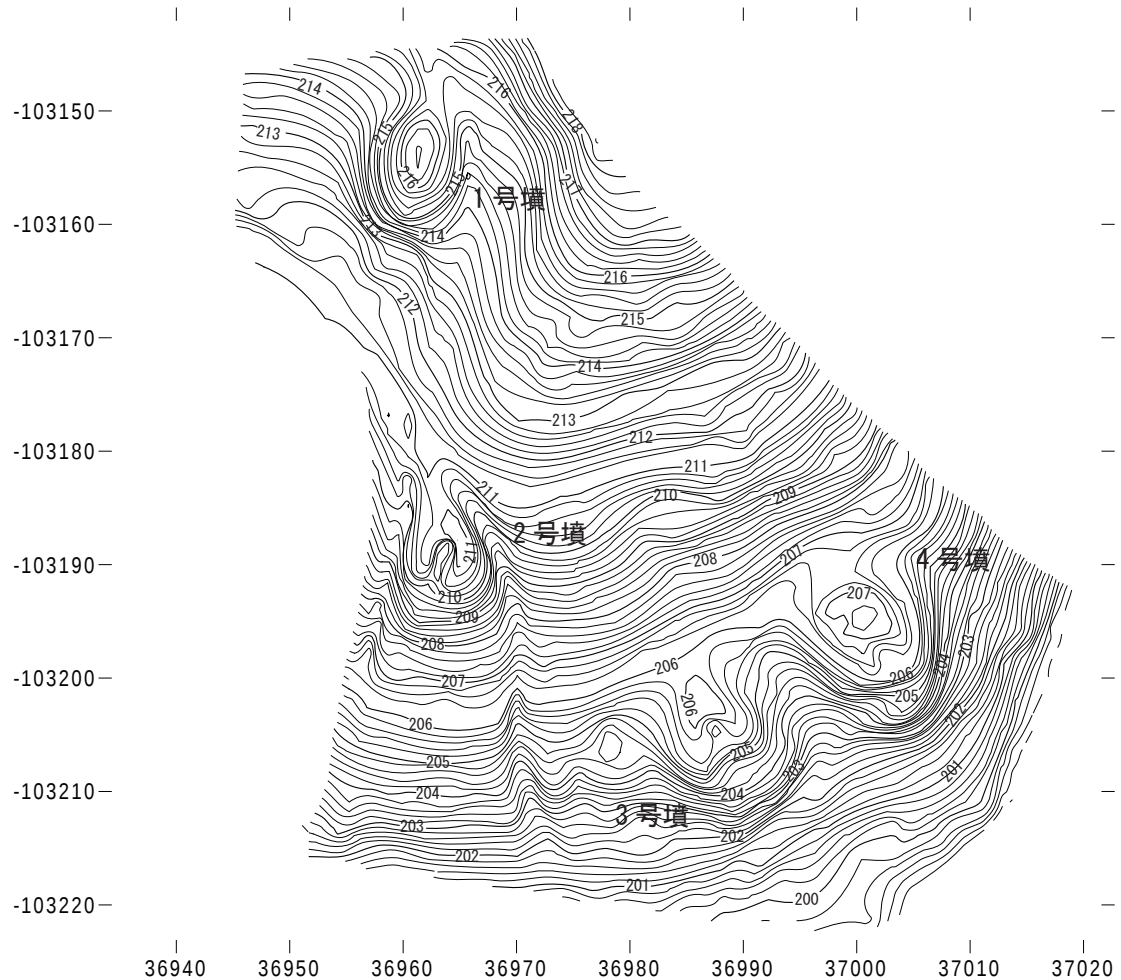


図3 城山古墳群分布図（縮尺 1/400）

4. 各古墳の状況

1号墳

1号墳は城山古墳群の中で最も標高の高い所に位置する。墳丘と石室はほぼ築造当時のまま残存している。石室は南南西に開口している。

墳形は楕円形の円墳で、高さ約4m、長軸約13m、短軸約8mを測る。墳丘の周囲には周濠がみられ、周濠の幅は約1.5mである。また、東側が大きくくぼんで周濠となっており、墳丘土を採った跡であると推測される。

埋葬施設には無袖の横穴式石室をもつ。石室の全長は8.4mを測る。石室を構成する石には山石が使用されている。石室の奥壁は2石で構成され、2石のうち下側の石は石室に面した横幅が1.15mを測る。石室内には土が入り床面はほぼみえない状態だが、石室の奥から1.7mまでの範囲は一段低くなっており、これは後世に掘削がおこなわれたためである。その部分でみると、側壁は4段で構成されていることがわかる。また側壁の最上部にのみ持ち送りがみられた。

側壁を構成する石は、石室の奥から2.8m～3.8mの間では1mから0.6m前後の大きさの石が使用され、それより入口側では0.6mから0.3m前後の比較的小さい石が使用されている。



写真1 1号墳墳丘正面



写真2 1号墳石室奥

側壁の奥へ行くほど大きい石で構成されていることがわかる。石室の幅は奥が1.25m、石室の開口部は0.9mである。石室の奥から約3mの地点で最大幅1.7mを測り、奥から西側に一度ふくらんだのち開口部に向かって幅が狭くなっている。

1号墳は、石室使用石材が比較的大きく形も整っていること、また側壁の持ち送りが顕著でないことから城山古墳群の4基の古墳の中で最も新しく築造されたと考えられる。

1号墳の横穴式石室は城山古墳群の4基の古墳の中でとくに残存状態がよく、石室の形態が明らかである。1号墳の横穴式石室を播磨や畿内の石室と比較すると、同時期の畿内にはあまりみられない無袖の石室形態をとる。このことから、1号墳の無袖横穴式石室は畿内とは違った系譜をもつものであると推測される。

(縄手)

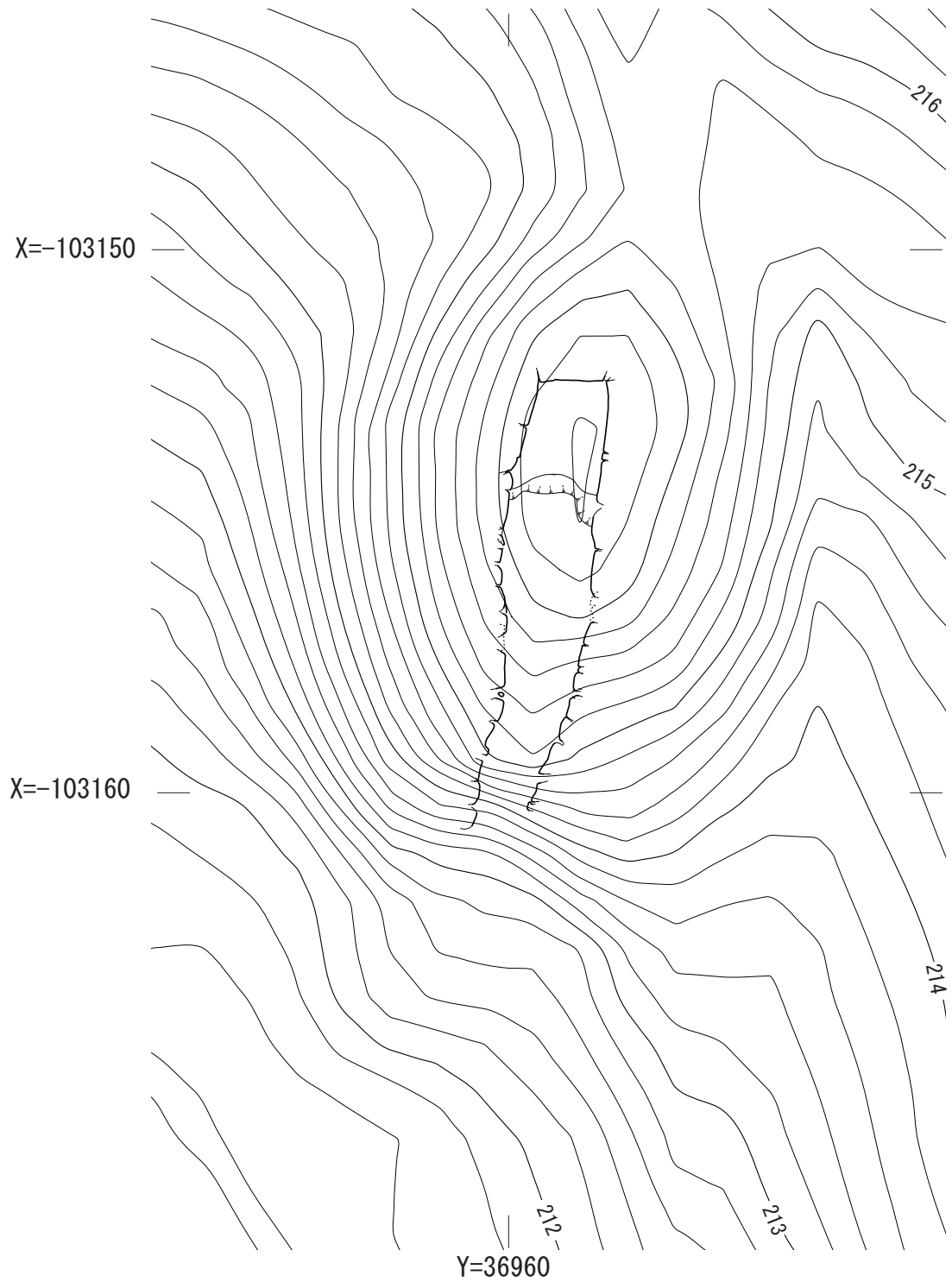


図4 1号墳（縮尺 1/120）

2号墳

2号墳は石室の崩落が激しく、奥壁と西側側壁をわずかに残すのみである。開口部は南西に向き、また、周辺には列石と推測される石も確認できた。墳形は楕円形の円墳で、墳丘の長軸が約12.5m、短軸は約8mをはかる。周濠は、幅約1.2mの溝となっているが、この溝は後世に道として利用するために周濠の部分を掘り下げたものであり。本来の周濠の幅は2m程度になると考えられる。墳丘西側は、後世の溝が墳丘に沿うようにのび、改変が著しく、本来の周濠は観察できない。

埋葬施設は横穴式石室でおそらく無袖と考えられるが、既述のように残存部が少ないため確証はない。残存部から計測すると、石室の幅は奥壁付近で約1mほどであったと推測される。奥壁は地上に現れている最下段の石が幅0.8m、その上に0.6mから0.7mほどである。1号墳と比較して小さめの石で多段に組まれている。そのため1号墳よりも築造年代が古く、1号墳の築造以前に無袖式の古墳が存在したと考えられる。西側壁にも幅0.6mから0.7mの山石を用いる。東側壁は崩れてしまったためか、原形をとどめない。床面も完全に土に埋もれており、一部に側壁とみられる石が点在する。

(吉岡)



写真3 2号墳

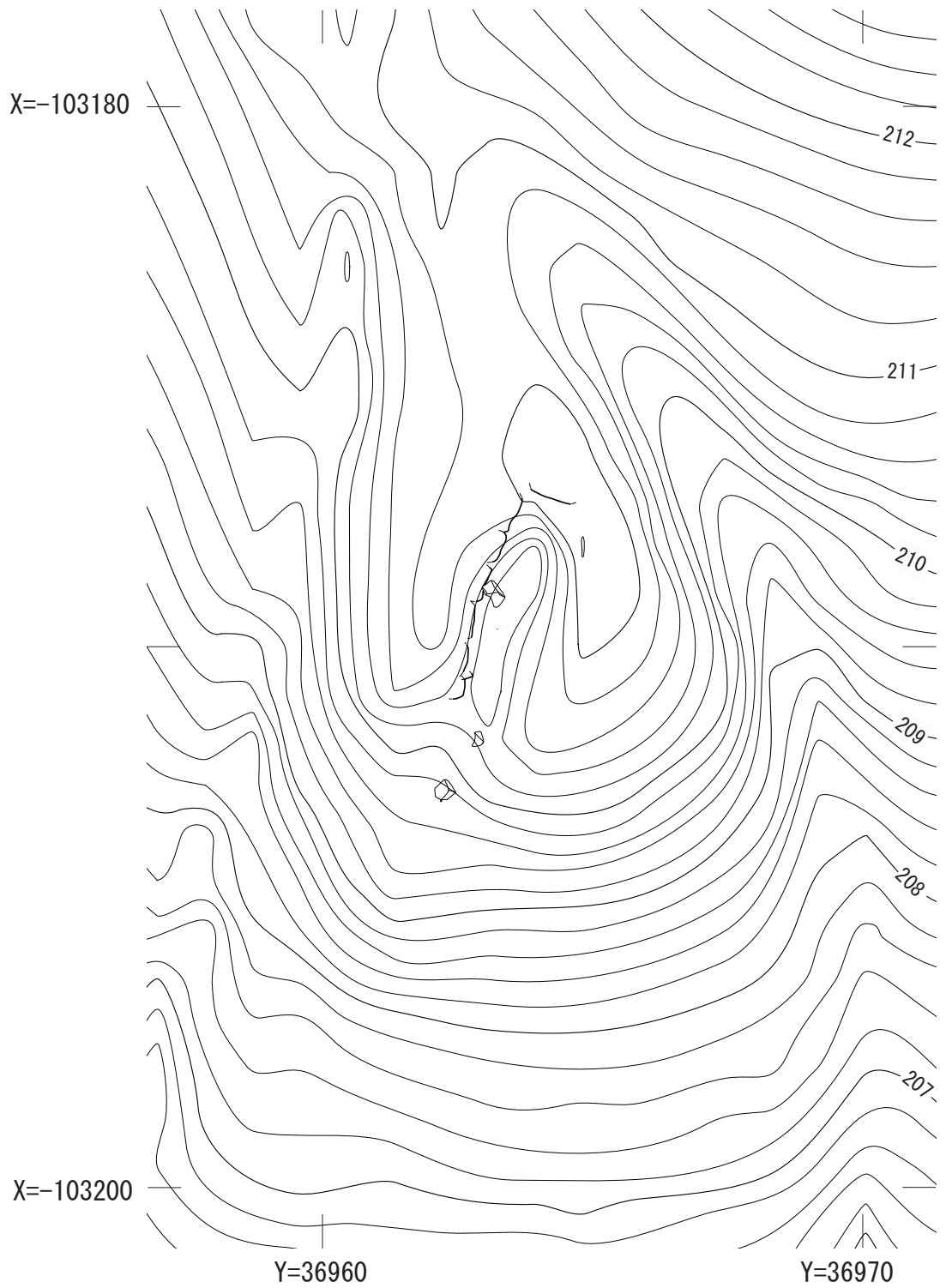


図5 2号墳（縮尺 1/120）

3号墳

3号墳は城山の南東斜面の中腹に位置する。ここは集落を見渡せる眺望の開けた場所であり、築造に際してはその立地が考慮されたものと考えられる。墳丘は後世の道によって削られ、一部の天井石が失われているものの、石室の入り口はへこみとして表れている。

墳形は円墳で、高さが約4m、長軸が約15m、短軸が約10mの楕円形である。



写真4 3号墳墳丘東側面



写真5 3号墳石室上部



写真6 4号墳石室上部

石室は南東に向かって開口している。埋葬施設は横穴式石室で、全長は約3m、幅は残存部で約1mである。天井石の消失により、内部には土砂が堆積している。

4号墳

4号墳は3号墳の東側に隣接し、3号墳と同様に集落を見渡せる眺望の開けた場所に築造されている。墳丘は後世の道や石造物によって削られている。墳形は円墳で、高さが約4m、長軸が約16m、短軸が約11mの楕円形になっている。

石室は南東に向かって開口している。埋葬施設は横穴式石室で、全長は約4m、そのうち玄室部分の長さは約2.3mである。幅は玄室床部で約1.2m、天井部で約0.7mである。内部は天井石の崩落により土砂が堆積しているが、側壁は残存している。側壁に使用されている石は小さく、持ち送りが顕著なうえに玄室の前壁が高い。そのため、城山古墳群のなかでも比較的早期のものと考えられる。

3号墳と4号墳は城山中腹の斜面に並んでおり、周濠を共有していることから、ほぼ同時期に築造されたことがうかがえる。

(西垣)

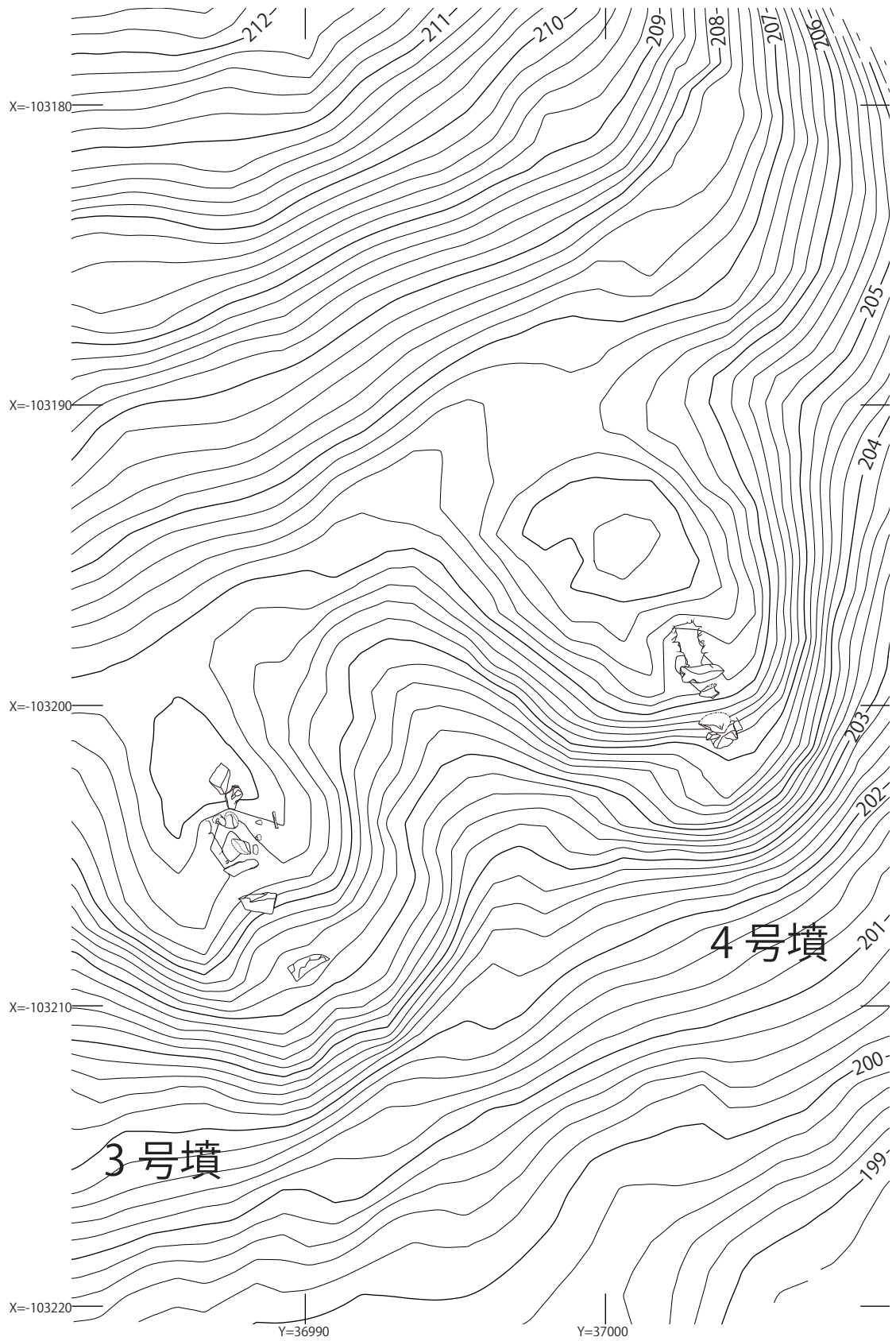


図6 3・4号墳（縮尺 1/200）

5. 城山古墳群出土遺物について

城山古墳群から出土したと伝えられている資料が現在神河町教育委員会で保管されている。今回そのなかから土器資料すべて 13 点の実測を京都府立大学考古学研究室がおこなった（図 1）。なお残念ながら個々の遺物がどの古墳から出土したなどの詳細な出土状況は不明である。

ただし一部の資料には注記がなされており、1967 年に調査が行われた際の資料であることが推測される。実測した資料は須恵器の杯蓋が 6 点（1～6）、杯身 5 点（7～11）、提瓶 1 点（12）、土師器の壺が 1 点（13）である。

杯蓋 法量に著しい差異が存在し、最も大きい杯蓋（6）は口径 15.4cm、器高 4.9cm なのに対し、最も小さいもの（2）が口径 13.6cm、器高 4.4cm である。器形は全体的に丸く、端部に溝をもつものが多い。いずれの杯蓋も天井部に時計回りの回転ヘラケズリ、体部から端部にかけて回転ナデの痕を有しており、内部は回転ナデで調整が施されている。口径の大きなもの（6）は天井部の回転ヘラケズリが全体的になされているが、口径の小さなもの（4）の回転ヘラケズリは範囲が小さい。これは時期差を反映していると考えられる。大半の色調は青灰色である。なお杯蓋（4）は回転ヘラケズリのほか更に天井部に一方方向ヘラケズリの痕跡が残っている。色調は黄灰色であり一部自然釉がみられ、器壁も一定ではない。なお杯蓋（6）は杯身（11）とセットになっている。

杯身 口径は 12.2～14.2cm、器高は 3.7～4.7cm と杯蓋と同じく各法量が大きく異なりまとまりがない。全体として蓋受け部が外反することが特徴である。外面では底部に時計回りの回転ヘラケズリの痕跡がみられ、体部は回転ナデによって調整がなされている。内面も回転ナデで整形されている。色調は青灰色である。立ち上がりが明瞭なもの（7～9）とそうでないもの（10・11）の 2 種類に分けることができ、後者はその器形から時代が下るものと推定される。杯身（9）のみ黄灰色であり外面 3 分の 2 にかけて自然釉が施されており、底部は調整がなされておらず、杯蓋（4）と類似する特徴を有する。

提瓶 口縁部が一部欠けているほかは完形を保っている。把手は明瞭であり体部と口縁部の境目には接合痕とみられる沈線が残っている。体部内面では製作時に粘土板で閉塞した痕跡をみてとることができる。体部・口縁部ともに回転ナデによって仕上げられているが、閉塞部の反対側は回転ヘラケズリによって調整されている。閉塞部側は自然釉が施されている。

壺 口縁部は大きく失われているが、残された形状から土師器壺と考えられる。体部表面は回転ナデによって仕上げられており、体部外面は回転を利用したカキ目によって調整されており、底部は回転ヘラケズリがなされている。須恵器の製作技法を利用して作られたと推測できる。

小結

実測した土器資料は 6 世紀後葉～7 世紀初めのものと推定され、城山古墳群が築造もしくは利用されていた時期を反映していると考えてよい。ただしとくに須恵器杯において顕著にみられる通り時期差が存在する。また須恵器杯のなかには胎土や製作技法が他と大きく異なるもの（4・9）が存在しており、産地の違いを指摘することができる。（中村）

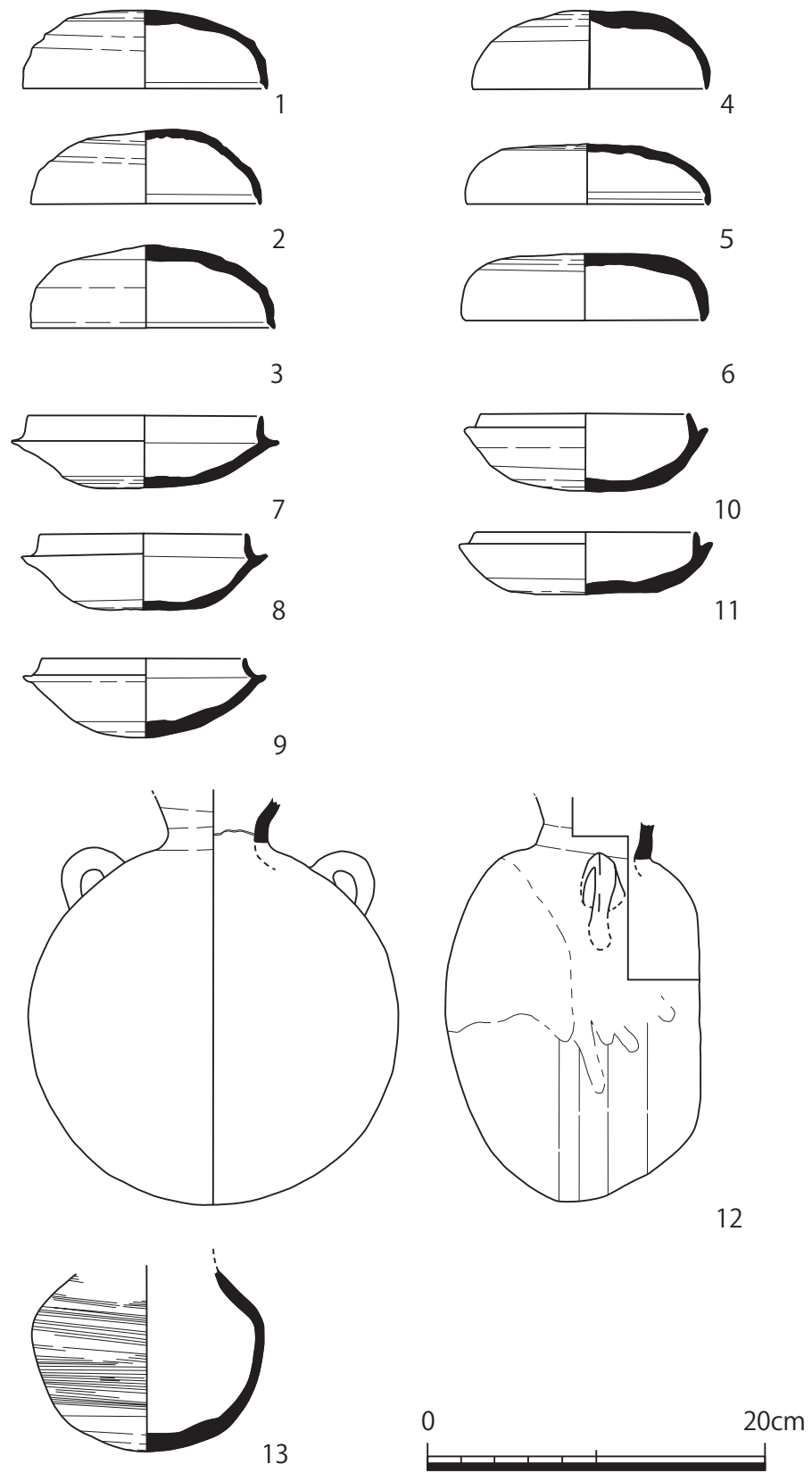


図7 城山古墳群出土土器（S=1/4）

6. 寺前地区における聞き取り調査

平成 27 年 9 月 17 日の 9 時ごろから 11 時 30 分ごろにかけて前寺前区長児島建美氏(70 才)と寺前区長である藤原信吾氏(67 才)に対して聞き取り調査をおこなった。そのなかで得られた成果を報告する。

寺前の人々にとっての城山と城山古墳群

児島氏や藤原氏に城山古墳群や城山について質問したところ、昭和 30 年代の寺前の人々と城山、城山古墳群との関わりが見えてきた。このころは両氏の子供時代であり、中学生のころまで城山を遊び場にしていたという。城山のふもとには寺前小学校と大河内中学校があり、子供たちの格好の遊び場であった。両氏にとって城山古墳群は、おどろおどろしいとか怖いという印象を与えるような場所で「怖いものみたさ」で古墳に遊びに行っていたという。石室もかなり深いものだと思っており、外から中を覗くだけであったようである。当時は、そのような遊び場が古墳群であるという認識はなく、大人になってから案内板を見て古墳が存在することを知ったということである。

昭和 30 年代の城山ははげ山で、正月になると「4H クラブ」と呼ばれていた青年団が頂上に国旗を掲げていたという。はげ山だった城山は、その後森林組合の植林によって現在のように森で覆われた山になった。当時は山中に古墳があることは教えられなかったが、山頂に寺前城があることは知っていたという。城山にはかつて稲荷神社もあった。今も神社の石垣が城山に残るが、両氏はかつてそれが寺前城の石垣だと認識していたようである。稲荷神社は現在、神河町役場の北側に移っている。

寺前地区の文化遺産

聞き取りをする中で、寺前地区の文化遺産についても話を聞くことができた。寺前地区には、羽柴秀吉に首を切られた寺前城主を祀るという伝承を有する、「首なし地蔵」が所在する。寺前地区に 11 組ある隣保のうち 4 組はこの「首なし地蔵」において地蔵盆をおこなうという。また、最明寺の檀家によって構成される地蔵講も残っており、数珠繰りをおこなう。伊勢講も残っており、伊勢神宮の神棚が 1 月ごと家々に持ち回りされ、毎月 1 日に御神酒やスルメ、



写真 7 寺前区での聞き取り調査

榊を供えているという。また、元伊勢や伊勢、籠神社に参拝する組もあるようである。1 月の下旬には、地域の行事として大日尊を祀るという。行事は最明寺の住職を招いておこなわれる。かつてはのぼりを立て、護摩を焚き、大豆のひきわりを牛小屋においていたという。昔は祭りに合わせて山伏が来訪していたようで、この地域と山岳信仰との関わりも指摘できる。また、大日尊は牛と関係の深

い仏であり、当時の寺前の人々が牛を大事にしていたこともうかがい知ることができる。

昭和 30 年代の寺前駅前

聞き取り調査のなかで、昭和 30 年代の寺前地区の中心地であった寺前駅前の様子が見えてきた。このころまでの寺前地区の人々にとって、各家の敷地内で牛を飼育するのが普通であった。寺前駅前では年に 2 回ほど牛市場が開かれ、当時の人々にとっての一大イベントだったという。他の集落から多くの人が寺前を訪れ、中には和歌山から訪ねてくる人もいたそうである。そのような人々のために駅前には旅館が建ち並び、牛市に合わせて出店も並び寺前駅前はたいへんにぎわったという。また、当時の寺前駅は蒸気機関車の給水場があり、神戸と城崎を結ぶ急行が停まるなど鉄道の往来がさかんであったようで、汽車が発出した後に残ったコークスを拾って自宅で使っていたとのことである。鉄道は山で切り出された木材を運ぶ役割を果たしていたようで、昭和 40 年ごろまでは駅の周辺に製材所が点在していたという。

聞き取りを終えて

聞き取り調査を通して、神河町の人々と城山、城山古墳群との関わりがみえてきた。また、9 月 19 日におこなった城山古墳群の説明会に来訪した吉岡清氏（昭和 25 年生）にお話を聞くことができた。そこから昭和 42～43 年にかけて中学校の教師が生徒を率いて発掘をおこなったことも判明した。これにより、神河町教育委員会が保管する伝城山古墳群出土土器の発掘時期が明らかになった。しかし、この時期にどのような経緯で学校の教師と生徒による発掘がおこなわれたのかは、学校教育の変遷や当時の地域の様子も踏まえて今後考えていく必要があるだろう。

さらに、地域の文化遺産について聞き取りをおこなう中で、近世に確立していく風習が、今も親しみを持って地域の人々に伝えられていることがわかった。地域の文化遺産を記録できたことは今回の大きな成果の一つだろう。とりわけ聞き取りを通して牛市場でにぎわう昭和 30 年代の寺前の様子を知ることができたのは、寺前地区の歴史を考える上で重要である。地域のなかで、牛と関係の深い大日尊を祀る行事が伝わっていることともあわせて、当時の寺前区の人々の生業において牛の果たした役割がどれだけ大きかったかをうかがえた。

（近藤）

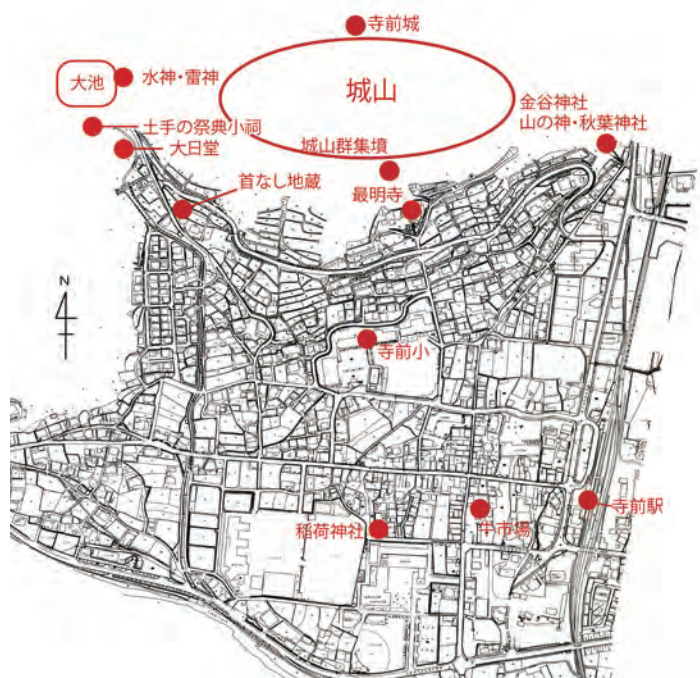


図 8 寺前区の文化遺産)

7. 調査のまとめ

城山古墳群は、横穴式石室が開口する 1 号墳について古くから知られ、神河町の代表的な後期古墳として評価されてきた。今回の調査では、1 号墳に加え、2 号墳、3 号墳、4 号墳について測量をおこなうことができ、基礎的なデータを得ることができた。その結果、3 号墳と 4 号墳が最初に築かれ、続いて 2 号墳、そして最後に 1 号墳という築造順序が横穴式石室の構造から推測できるようになった。1967 年に実施された発掘についても聞き取りと土器の注記から明らかになったが、残念ながら、土器の出土位置を確定するには至っていない。しかしながら、それらの出土土器についての検討も踏まえると、6 世紀後葉から 7 世紀初頭にかけて営まれた古墳群であることは確実視でき、1 号墳が全長 8 m を超えるものであったことを考慮すると、地域の首長の墓域とみて差し支えないだろう。

1 号墳は無袖の横穴式石室であり、2 号墳もその可能性が高い。播磨では大型の横穴式石室が両袖または片袖の石室であることが一般的であり、多可町奥豊部古墳群のように播磨北部で無袖の大型横穴式石室が散見される。そのため、近畿地方北部の墓制との関係が推測されているが、市川流域においても、同様に但馬の影響を考えるべきであろう。その意味では、播但の交通の結節点という地域性を反映する事実として城山古墳群の無袖横穴式石室を捉えることができる。

城山古墳群は、比高差が 50 m 以上もある山腹に位置しており、そこからは寺前や新野だけでなく、市川東岸も見渡すことができる。地域の首長が、集落や耕地を見渡せる位置に古墳を築造したという点で、典型的な「村の墓地」とみなすことができよう。『播磨国風土記』に記載される神前郡埴岡里は、いくつもの集落で構成されていたと推測されるが、その構成を後期古墳の分布から復原することが可能である。このような検討にとっても、城山古墳群は重要な意義をもっていると言えよう。



写真 8 測量の作業風景

城山古墳群は、古くから地域の人々に親しまれていたことも、聞き取りによって明らかになった。この古墳群の重要性を再確認するとともに、環境の整備をおこないながら、活用されることを切に希望する。



写真 9 小学生への説明会

今回の調査に際し、最明寺住職の井上智博氏、寺前区の藤原信吾、児島建美の両氏、神河町教育委員会の澤田博行、坂田英之、竹国よしみ、山下かよの各氏にたいへんお世話になった。末筆ながら記して感謝の意を表したい。（菱田）